慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	宮下啓三教授著作目録
Sub Title	Veröffentlichungen
Author	
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2001
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.81, (2001. 12) ,p.373(40)- 410(3)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	宮下啓三教授退任記念論文集 宮下啓三教授 略歴・主要業績
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00810001-0410

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

史・社会科学部門での表彰（著書「ウィリアム伝説」に）
1984年　義塾賞（著書「十八世紀ドイツ戯曲のブランクヴァース」に）
以上

宮下啓三教授著作目録

1．著書・編著書

1.1. 著書

1．中立をまもる　―スイスの栄光と苦難―　講談社（講談社現代新書）1968年7月
2．近代ドイツ演劇　慶應通信　1973年2月
3．文学（桧谷昭彦・高山鉄男氏らとの共著）慶應通信　1976年3月
4．スイス・アルプス風土記　白水社　1977年7月
5．ウィリアム・テル伝説　―ある英雄の虚実―　日本放送出版協会（NHKブックス）　1979年8月
6．テレビ大学講座　ドイツの言語文化（西尾幹二氏との共著）旺文社　1980年11月
7．メルヘン案内　―グリム以前・以降―　日本放送出版協会（NHKブックス）1982年4月
8．近代ドイツ小説　慶應通信　1983年9月
9．十八世紀ドイツ戯曲のブランクヴァース　慶應義塾大学言語文化研究所　1984年2月
10．グリム・森と古城の旅（NHK取材班との共著）　日本放送出版協会　1986年2月
11．700歳のスイス　―アルプスの国の過去と今と未来―　筑摩書房（ちくまライブラリー）　1991年11月
12．人間を彫る人生　―エルンスト・バルラハの人と芸術―　国際文化出版社　1992年1月
13．教育の場における表現芸術（松永記念文化財研究基金による研究の報告）　1994年3月

14. 目録　ヨーロッパから持ち帰られた小山内薫の演劇絵葉書　慶應義塾図書館蔵（小平麻衣子さんの助力による）　慶應義塾大学三田メディアセンター　1995年７月
15. ヨーロッパから持ち帰られた小山内薫の演劇絵葉書　慶應義塾図書館蔵（小平麻衣子・桜井千絵さんの協力による）　慶應義塾大学藝文学会　1995年11月
16. 改訂 近代ドイツ演劇　慶應義塾大学出版会　1996年10月
17. 改訂 近代ドイツ小説　慶應義塾大学出版会　1997年４月
18. 日本アルプス　―見立ての文化史―　みすず書房　1997年５月
19. メルヘンの履歴書　慶應義塾大学出版会　1997年７月

1.2. 編纂と解説

1. 野尻抱影の本３　山で見た星（編集と解説）　筑摩書房　1989年１月
2. 野尻抱影『星まんだら』（編集と解説）　徳間書店（徳間文庫）　1991年７月

2. 学術論文

1. 表現主義的人間（１）―Ｆ・ヴェルフェル『鏡人』をめぐって―慶應義塾大学藝文学会『藝文研究』３号（1961年12月）
2. Deutsche Literatur im Exil. Bemerkungen über W. M. K. Pfeilers Monographie : "German Literature in Exile" 日本独文学会『ドイツ文学』30号（1963年３月）
3. 表現主義的人間（２）―Ｅ・バールラハ『青いボル』の場合―慶應義塾大学藝文学会『藝文研究』16号（1963年10月）
4. デュレンマットの舞台世界あるいはグロテスクな悲喜劇的空間　しんせい会『NEUE STIMME』４号（1965年５月）
5. 孤独なオベリスク（１）―スイス文学についての覚え書き―　しんせい会『NEUE STIMME』８号（1968年４月）
6. （ドイツを中心とした）ルネサンス初期の悲喜劇　―中世と近世の間

で―　慶應義塾大学言語文化研究所『第2部第7回研究総会における報告（8）』（1968年7月）

7．孤独なオベリスク（2）―スイス文学についての覚え書き―　しんせい会『NEUE STIMME』　9号（1968年10月）

8．スイス中立の再評価とその文献　慶應義塾大学法学研究会『法学研究』第42巻第2号（1969年2月）

9．死にみはなされた死者―続・デュレンマットの舞台世界―　しんせい会『NEUE STIMME』10号（1969年4月）

10．バリケードと諧謔．ネストロイ『クレーヴィンケルの自由とパンフレット合戦』しんせい会『NEUE STIMME』11号（1969年12月）

11．Max Frisch: Dramaturgisches. Ein Briefwechsel mit Walter Hollerer. Literarisches Colloquium Berlin, 1969. 日本独文学会『ドイツ文学』44号（1970年5月）

12．デュレンマットのシェイクスピア翻案　日本演劇学会『日本演劇学会紀要』13号（1972年9月）

13．或る小さな留学―スイス作家ケラーのドイツ留学―　しんせい会編集（NS叢書）『留学の思想』所収（1972年9月）

14．ゲルステンベルクの演劇美学　―十八世紀ドイツにおけるシェイクスピア礼讃の一例―　武蔵大学人文学会『武蔵大学人文学会雑誌』第4巻　3／4号（1973年3月）

15．„Die Schweiz in Japan" ―Das Japanesenland in den Schwyzer Fastnachtsspielen― 日本独文学会『ドイツ文学』（1973年10月）

16．謝肉祭劇『日本のスイス』―中央スイスの民衆劇と日本のテーマ―慶應義塾大学言語文化研究所『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』5号（1973年12月）

17．罪なき者の罪悪感について―第二次世界大戦とスイスとユダヤ人および亡命作家の問題について―しんせい会編『日本人から見たユダヤ問題』（三修社）所収（1975年5月）

18．ゲルステンベルクとブランクヴァース　慶應義塾大学言語文化研究所

『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』 8号（1976年12月）

19. „ Wilhelm Tell für die Schule der gescheiterten Demokratie" —Ein kurzes Referat über die Rezeption der deutschen Literatur in der japanischen Aufklärungszeit— 日独共同研究誌『Kultur und Erziehung（教育と文化）』 2号（1977年4月）

20. "Irgendetwas Unnennbares, wahrscheinlich Morgenländisches". Anmerkungen zur Hermann Hesse Rezeption in Japan. In: TEXT + KRITIK. München（1977年5月）

21. ケラー『緑のハインリヒ』とその二つの版—ハインリヒ・レーの死と生— しんせい会編『教養小説の展望と諸相』（三修社）所収（1977年7月）

22. ヘルダーとそのブランクヴァース 慶應義塾大学言語文化研究所『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』 9号（1977年12月）

23. „ In diesem Sinne kannst du's wagen" —Goethes *Faust* auf der japanischen Bühne—日本ゲーテ協会『ゲーテ年鑑』20巻（1978年10月）

24. 鎖を解かれた諷刺精神—1848年のウィーン喜劇— 慶應義塾大学藝文学会『藝文研究』40号（1980年9月）

25. 十九世紀ドイツ演劇の展望と問題点 十九世紀ドイツ文学研究会編『十九世紀ドイツ文学の展望』（郁文堂）所収（1981年10月）

26. レッシングの無韻詩行戯曲のこころみ—ブランクヴァース戯曲史の一段階— 慶應義塾大学藝文学会『藝文研究』43号（1982年12）

27. ヴィーラントの『レディ・ヨハンナ・グレイ』—最初に上演されたブランクヴァースによるドイツ創作戯曲— 慶應義塾大学藝文学会『藝文研究』44号（1982年12月）

28. スイス連邦憲法の全面改正への歩み —作業部会の討議報告書について— 慶應義塾大学法学研究会編『法学研究』第56巻 第3号（1983年3月）

29. 押韻に反抗した若き詩人ピューラ —十八世紀ドイツのブランクヴァ

ース戯曲成立の背景―　慶應義塾大学法学研究会編『教養論叢』69号（1985年３月）

30. ヴィーラント　―非ドイツ的古典主義者―　日本ゲーテ協会『ゲーテ年鑑』27巻（1985年10月）

31. 人間教育の理想としての美　―シラーの『人間の美的教育に関する書簡』―『ロマン主義教育再興　西村皓教授還暦記念論集』（東洋館出版社）所収（1986年１月）

32. ハムレット第四独白の独訳比較　―ブランクヴァース戯曲史の一傍証―　慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会編『慶應義塾大学日吉紀要ドイツ語学・文学』４号（1987年３月）

33. 独白に傾く対話　―シュニッツラーの戯曲の世界―　慶應義塾大学藝文学会『藝文研究』52号（1988年３月）

34. 山岳美の詩的発見　―ハラー『アルプスの山々』について―　慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会編『慶應義塾大学日吉紀要ドイツ語学・文学』８号（1989年３月）

35. シュレーダーの演劇的使命　―『エミーリア』から『ハムレット』まで―　慶應義塾大学法学研究会編『教養論叢』81号（1989年３月）

36. ドイツ演劇におけるブランクヴァース　―比較演劇の視点からの文体論研究―　早稲田大学演劇学会編『演劇学』31号（1990年１月）

37. Kunsthistorischer und kulturpolitischer Hintergrund der Schweizer Literaturgeschichte　慶應義塾大学藝文学会『藝文研究』58号（1990年11月）

38. レートロマン語の現状　―現代スイスにおける言語文化政策の実情についての報告―　慶應義塾大学言語文化研究所『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』23号（1991年12月）

39. Goethe und kein Ende—Japans Begegnung mit dem Westen und dem Dichter —In: Symposium „ Goethe und die Weltkultur" — Veröffentlichungen des Japanisch Deutschen Zentrums Berlin.Bd. 15.（1991年12月）

40. スイス建国700年記念祝祭劇　―ヘルベルト・マイヤーの『ミーテン劇』について―　慶應義塾大学藝文学会『藝文研究』60号（1992年3月）

41. スイス啓蒙時代のシェイクスピア　―ボードマーに始まるシェイクスピア受容の拝啓と軌跡―　日本独文学会『ドイツ文学』90号（1993年4月）

42. „ In diesem Sinne kannst du's wagen" Goethes „Faust" auf der japanischen Bühne. In: Zur Rezeption von Goethes "Faust" in Ostasien. Hrsg. v. Adrian Hsia. Bern (Peter Lang). (1993年5月)

43. 神の代役を演じる自然―アルブレヒト・フォン・ハラーとスイス啓蒙思想―慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会『慶應義塾大学日吉紀要　ドイツ語学・文学』17号（1993年9月）

44. 「日本人劇」の誕生と伝統―中央スイスの謝肉祭劇についての報告―慶應義塾大学法学研究会『教養論叢』96号（1994年3月）

45. 無言の彫刻に代わって語る詩人たち―エルンスト・バルラハの人と芸術を題材にした詩　慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会『慶應義塾大学日吉紀要　ドイツ語学・文学』18号（1994年3月）

46. 危機時代のスイス家族を描いた小説　―イングリーンの『スイスを映す鏡』の主題と構造　慶應義塾大学藝文学会『藝文研究』68号（1995年5月）

47. 絵葉書が証言する小山内薫の洋行　―慶応義塾図書館蔵の演劇絵葉書についての報告―　慶應義塾大学藝文学会『藝文研究』69号（1995年12月）

48. 版画の中のゲーテとシラーの詩　―バルラハの作品に見る2人の詩人の対照―　慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会『慶應義塾大学日吉紀要　ドイツ語学・文学』23号（1996年9月）

49. ハイネとシェイクスピア　―アングロフォビアとシェイクスピアロマニアの関係―　慶應義塾大学藝文学会『藝文研究』73号（1997年11月）

50. Die Attraktivität von Poesie und Bildung —Wie die Japaner den Zauber der deutschen Literatur entdeckten—日本独文学会『ドイツ文学』100号（記念号）（1998年3月）
51. 多言語の小国とその文学　——一つの「スイス文学」の像を求める努力の歴史—　森田安一編『スイスの歴史と文化』（刀水書房）所収（1999年1月）
52. 現代日本人の「メルヘン」意識　—西洋メルヘンと日本昔話についての意識調査の結果と分析—　日本独文学会『ドイツ文学』102号（1999年3月）
53. 『兄殺しの報い』と『ハムレット』　—18世紀ドイツの巡回劇団のハムレット悲劇について—　慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会『慶應義塾大学日吉紀要　ドイツ語学・文学』28号（1999年3月）
54. スイス山岳地域の「日本人劇」　—演劇学と民俗学のはざまにある研究対象についての報告—　日本演劇学会編『演劇学論集　紀要37　日本演劇学会創立50周年記念号』（1999年9月）
55. J.E. シュレーゲルの喜劇観　—ドイツ十八世紀演劇の先導者のジャンル観と実作—　慶應義塾大学藝文学会『藝文研究』76号（1999年10月）
56. J.E. シュレーゲルの『無口の美女』　—18世紀ドイツ啓蒙主義期の韻文喜劇—　慶應義塾大学法学研究会『教養論叢』111号（2000年1月）
57. Deutsche Dramen auf japanischen Bühnen. Verzeichnis der auf japanisch gespielten Stücke. In: Evokationen. Gedaechtnis und Theatralitaet als kulturelle Praktiken. Hrsg. v. der Japanischen Gesellschaft für Germanistik. München (iudicium) (2000年12月)
58. ディルタイとその時代　西村・牧野・舟山編『ディルタイと現代』（法政大学出版会）所収（2001年3月）
59. ホームシックとスイス人　—スイス文学のテーマとしての望郷と帰郷—　森田安一編『岐路に立つスイス』（刀水書房）所収（2001年4月）
60. 西洋演劇における「語り」の位置づけ—近代ドイツ演劇（レッシング

とシラー）からの事例―「日本演劇学会紀要39　演劇学論集2001」(2001年11月)

3．翻訳

3.1. 翻訳書

アルマ・マーラー＝ヴェルフェル『我が愛の遍歴』(塚越敏氏と共訳) 筑摩書房　1963年2月

ユルゲン・タムヒーナ（文)／ハイドルン・ペトリーデス（絵)『世界の絵本（スイス）アビニヨンの龍』 講談社　1971年2月

マリアンネ・ケスティング 『ブレヒト』 理想社　1971年11月　月

バーナデット・ワッツ（文と絵)『世界の絵本（スイス）ひとりぼっちのハンス』 講談社　1972年3月

アドルフ・ムシュク『兎の夏』 新潮社　1972年9月

A・バウムガルトナー他『山岳の世界』(西堀栄三郎氏と共同監修．石井不二雄氏らと共訳) 大修館書店　1981年4月

エーゴン・フリーデル『近代文化史1』 みすず書房　1987年5月

エーゴン・フリーデル『近代文化史2』 みすず書房　1987年11月

エーゴン・フリーデル『近代文化史3』 みすず書房　1988年4月

スイス山岳研究財団編『マウンテン・ワールド　第2巻　1947』 小学館　1989年6月

スイス山岳研究財団編『マウンテン・ワールド　第6巻　1951』 小学館　1989年6月　月

マンフレート・シェーラー 『シェイクスピアの英語』(岩崎春雄氏との共訳) 英潮社　1990年10月

3.2. 翻訳（全集・アンソロジー・雑誌等）

慶應義塾大学名誉学位授与式でのアデナウアー独逸連邦共和国首相の演説『三田評論』 1960　6月◆W・シュタフォンハーゲン「演奏者のことば」『世界名曲全集　ベートーヴェン，ピアノ三重奏曲「太公」』(筑摩書房)

1962年7月◆トマス・イムモース「日本にて詠めるドイツ詩二題」 しんせい会『NEUE STIMME』10号 1969年4月◆ラルフ＝ライナー・ヴーテノー「没落前の貴族 エードゥアルト・フォン・カイザーリング」 しんせい会『NEUE STIMME』10号 1969年4月◆Kazuo Nagai: Baigans Theorie des Herzens（ドイツ語への翻訳） 東洋館出版社『Kultur und Erziehung』1号 1969年年7月◆アドルフ・ムシュク「『日本小説』と自己批判」（匿名） 新潮社『新潮』 1969年9月◆ビーダーマン編「ゲーテ対話録V」第三部 索引 C ゲーテ（1）人物（2）作品『ゲーテ対話録V』（白水社）所収 1970年2月◆フンボルト「ベルリン大学論 高等教育についての小論」 平塚・村井共編『西欧文化への招待 26 教育の系譜』（グロリア・インターナショナル）所収 1971年1月◆フェリクス・クレー「父パウル・クレーを語る」 座右宝刊行会『現代世界美術全集13 クレー』（集英社） 1971年1月◆タンクレート・ドルスト「城壁の前での大いなる弾劾」『現代世界演劇8 不条理劇（3）』（白水社）所収 1971年9月◆カロッサ「ある星が歌う」「代償の総額」「挨拶」「神秘」／ハイム「オフィーリア」「おお，遠い，遠い夕べ」「浅い眠り」「ロビスピエール」『世界文学全集48 世界詩集』 1972年1月◆フムボルト「大学の理念 ―『ベルリン高等学術施設論』」 村井実編『原典による教育学の歩み』（講談社）所収 1974年10月◆シラー「群盗―5幕の劇―」「ディミトリー（デメートリウス）」（付「シラー」「群盗」「ディミトリー」「シラー年譜」）『世界文学全集 17 レッシング／シラー／クライスト』（講談社）所収 1976年8月◆法治国家の限界めぐり激論 ―「フランクフルター・アルゲマイネ」紙と「シュピーゲル」誌―（匿名） 朝日新聞社『朝日ジャーナル』 1977年10月◆テロリズムは死んでいない ―ヘルムート・シュミット西独首相の演説― 朝日新聞社『朝日ジャーナル』 1977年11月◆アードルフ・ムシュク「ドイツ娘のスイス訪問」 スイス文学研究会編『スイス文学叢書2 スイス二十世紀短編集』（早稲田大学出版部）所収 1977年 11月◆ゲーテ「クラヴィーゴ」（付「解説」）『ゲーテ全集 4』潮出版社 1979年7月◆フリードリーン・ホーファー

「人間の屑」／アルフレート・フッゲンベルガー「草刈る男」／アルベルト・エーリスマン「一九四〇年の追想」／クルト・マルティ「犠牲者ニ善ヲホドコスコト」「君ヨ知ルヤ　並ハズレテ太ッタ娘ノ悩ミヲ」／イェルク・シュタイナー「学校で生徒たち…」／アルブレヒト・フォン・ハラー「アルプスの山々」 スイス文学研究会編『スイス文学叢書4　スイス詩集』（早稲田大学出版部）所収　1980年5月◆カロッサ「ある星が歌う」ほか／ハイム「オフィーリア」ほか 『世界文学全集 世界詩集』（講談社）所収（1972年1月刊行の訳詩集の新装改版） 1981年1月◆フリードリヒ・デュレンマット「天使バビロンに来たる」 スイス文学研究会編『スイス文学叢書5・デュレンマット・物理学者たち』（早稲田大学出版部） 1984年5月◆フリッチョフ・ローディ「生そのもののリズム　—晩年のディルタイの目から見たゲーテとヘルダーリン—」 日本ディルタイ協会『ディルタイ研究』1号　1987年7月◆ヘルベルト・ハフナー「世界のオーケストラ　第1回　ベルリン・フィル」その1　音楽之友社『レコード芸術』 1989年9月◆ヘルベルト・ハフナー「世界のオーケストラ　第2回　ベルリン・フィル」その2　音楽之友社『レコード芸術』 1989年11月◆ヘルベルト・ハフナー「世界のオーケストラ　第3回　ベルリン・フィル」その3　音楽之友社『レコード芸術』 1989年12月◆「失われた谷」ほかスイス伝説20編　スイス文学研究会編『スイス文学叢書6　スイス民話集成』（早稲田大学出版部）所収　1990年7月◆ヘルベルト・ハフナー「世界のオーケストラ　第12回　ライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団　その1」 音楽之友社『レコード芸術』 1990年9月◆ヘルベルト・ハフナー「世界のオーケストラ　第13回　ライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団　その2」 音楽之友社『レコード芸術』 1990年10月◆Die erste Besteigung des Eiger Nordostgrates. In: EIGER Die vertikale Arena, hrsg. von Daniel Anker. Zürich [AS Verlag] 1998.〔槙有恒のアイガー東山稜登攀記の抄訳〕1998年5月◆シラー「群盗」（改訳）西洋比較演劇研究会編『ベスト・プレイズ　西洋古典戯曲』 2000年5月

4. 語学教科書

Wolfgang Borchert: Draußen vor der Tür〔ヴォルフガング・ボルヒェルト「戸口の外で」〕南江堂　1961年10月◆Vier Schweizer Erzählungen aus den drei Sprachgebieten〔スイス四つの物語〕三修社　1968年9月◆Schritt für Schritt mit der deutschen Grammatik〔ドイツ語文法一歩一歩・文法篇〕文林書院　1969年2月◆Friedrich Dürrenmatt: Das Bild des Sisyphos〔フリードリヒ・デュレンマット「シジフォスの絵」〕南江堂　1969年9月◆Deutsche Grammatische Übungen〔ドイツ文法のエチュード〕東洋出版　1972年4月◆Tabellen der deutschen Grammatik〔表示式ドイツ文法・問題篇〕東洋出版　1972年4月◆Tabellen der deutschen Grammatik〔表示式ドイツ文法・別冊問題集付〕東洋出版1972年4月◆Adolf Muschg: Besuch in der Schweiz〔アドルフ・ムシュク「スイス訪問」〕第三書房　1978年3月◆Deutsche Grammatische Übungen〔ドイツ文法問題集〕(改訂) 東洋出版　1978年6月◆Deutsche Grammatische Übungen —Fragen und Antworten—〔ドイツ文法自習問題集—自己採点式—〕東洋出版1978年6月◆Landschaft und Wirtschaft (Österreich／Schweiz)〔スイス・オーストリーの風土〕同学社1978年9月◆Deutsche Grammatik Eine progressive Einführung〔段階ドイツ文法〕東洋出版　1979年4月◆Erstes deutsches Sprachbuch〔はじめてのドイツ語〕郁文堂1982年4月◆Deutsche Grammatische Übungen〔小さなエチュード〕東洋出版　1982年5月◆翻訳独文法　Buch 1　日本翻訳家養成センター　1984年7月◆翻訳独文法　Buch 2　日本翻訳家養成センター　1984年7月◆Illustrierte Einführung in die deutsche Sprache〔イラストドイツ語入門〕郁文堂　1990年4月◆Illustrierte Einführung in die deutsche Sprache〔イラストドイツ語入門—新訂版〕郁文堂1993年4月◆Erste Schritte in die deutsche Sprache〔ドイツ語はじめの一歩〕第三書房1997年3月◆Illustrierte Einführung in die deutsche Sprache〔イラストドイツ語入門—三訂版〕郁文堂1999年4月

5．演劇・映画関係

戦後ドイツの演出と俳優—西独を中心に—　三笠書房『現代の演劇　4　世界の演劇　ヨーロッパ篇』所収1965年11月◆ドイツ・オペラの「アメリカ」事件　『芸術新潮』1967年1月◆話題作「大統領の死」現代演劇協会機関紙『雲』12号　1967年3月◆侮辱された観客　—ビート演劇？—　三田文学会『三田文学』1967年5月◆芝居でない芝居　—ドイツで聞いた深夜の大喝采—『雲』13号　1967年6月◆演出を見る楽しみ　—ピッコロ・テアトロとストレレルのこと—　早川書房『悲劇喜劇』所収　1967年9月◆仮面について　劇団四季アートシアター演劇公演「城壁の前での偉大なる弾劾演説」公演パンフレット1967年2月◆私家製プログラムのたのしみ　劇団四季第47回公演　ジャン・ジュネ「バルコン」パンフレット　1968年2月◆生か死か，と問わない内に…　—悲劇の主役になる資格をもたない小人間たちの悲劇的喜劇—　1969年4月◆劇場で描く　—舞台スケッチ抄—　しんせい会『NEUE STIMME』10号　1969年1月（スケッチ6点）◆過剰な現実にあざむかれた現実「アレキサンドリア物語」『自由』（映画時評）1970年2月◆ヨーロッパ演劇史二つの視点　慶應義塾大学『塾』1970年2月◆紛失　『自由』（映画時評）1970年3月◆無邪気さの背後の薄気味悪さ「サンタ・ピットリアの秘密」『自由』（映画時評）　1970年4月◆催涙劇と催涙弾「天使のコイン」『自由』（映画時評）　1970年5月◆喜劇の卵をかえす方法について—民芸公演「ロムルス大帝」—『テアトロ』1970年5月◆性喜劇—新しきは古きに帰る「ボブ&キャロル&テッド&アリス」—『自由』（映画時評）1970年6月◆映画的スカイジャック「シシリアン」『自由』（映画時評）1970年7月◆パルレ・モワ・ダムール（聞かせてよ愛の言葉を）しんせい会『NEUE STIMME』12号　1970年7月◆不自由からの逃走「イージー・ライダー」『自由』（映画時評）　1970年7月◆喜劇の精神文化史　慶應義塾大学『慶應義塾大学報』1970年8月◆戦争映画のドラマトゥルギー「地下組織」『自由』（映画時評）　1970年8月◆リントベルク演出の『メテオール』　現代演劇協会報『DARTS』31号1970年8月◆第二のルネサンス—現代スイス演劇展望—付・オーストリア

の劇作家たち『テアトロ』1970年8月（増刊　ドイツ演劇号）◆リアリズムのおもてうら「マッシュ」『自由』（映画時評）1970年9月◆『メテオール』談義　俳優座劇場「メテオール」公演パンフレット　1970年9月◆対談　デュレンマットの秘密（トマス・インモース氏との対談）『新劇』1970年9月◆紛失『自由』（映画時評）1970年10月◆死せる者たちの特権について「赤いテント」『自由』（映画時評）1970年11月◆おお欺瞞を好む神々よ「サテリコン」『自由』（映画時評）1970年12月◆リントベルク氏と『ファウスト』日本ゲーテ協会『ベリヒテ』11号　1970年12月◆シェイクスピア劇とチェス—デュレンマットの翻案—現代演劇協会『雲』29号1971年12月◆カスターニエンの葉陰の芝居談義　南江堂『KASTANIEN』20号　1971年12月◆老いやすい日本演劇　慶應義塾『三田評論』　1972年1月◆幕の分かれ目から出た首　現代演劇協会『雲』38号1972年6月◆「To Be, Or Not To Be」（筑摩書房刊「木下順二対談集」書評）『文藝春秋』1972年10月◆ヨーロッパ近代演劇史の基点　ジャーナリスティックな批評の集積（奥住綱男訳レッシング「ハンブルク演劇論」書評）『日本読書新聞』1972年10月◆悲哀の衣装としての笑い　三田文学会『三田文学』1973年3月◆固定観念に病む者はだれか—「七十五歳」のブレヒトが投げた波紋—　『毎日新聞』（夕刊）1973年6月◆デュレンマット—ペシミストのグロテスク・ユーモア—『民芸の仲間』150号（デュレンマット「プレイ・ストリンドベリ」公演パンフレット）1973年10月◆戯曲は廃れたのか—小説時代におけるドラマの可能性—『公明新聞』　1973年10月◆変身の技術をたのしむために—「プラクティカル　ステージ　メーキャップ」—『季刊　歌舞伎』24号1974年4月◆悲劇的主人公の墓標をたずねて—スタイナー氏の来日—劇団俳優座『コメディアン』1974年9月◆東西演劇の接点を探求する雄大なこころみ—河竹登志夫著「比較演劇学」—『季刊　歌舞伎』26号1974年10月◆ユニークな視点による労作—松本伸子著「明治前期演劇史」—『季刊　歌舞伎』28号　1975年4月◆十八世紀ドイツ戯曲とブランクヴァース　——つの戯曲文体が輸入され模倣されて定着されるに至るまでの過程について—　AMD編集発行『あ・え

む・で　演劇論研究１』 1975年８月◆シェイクスピアの文体はどのようにしてドイツ語化されたか　AMD編集発行『あ・えむ・で　演劇論研究２』1976年５月◆人間的な，あまりに人間的な—西洋演劇のメルヘン的要素—『季刊　歌舞伎』33号　1976年７月◆ヨーロッパ近代演劇の出発点に立つ人—レッシングの「ハンブルク演劇論」—日本放送出版協会『NHKラジオ　ドイツ語講座』1976年８月◆死の醜悪さを浄化する演劇美学の探求—諏訪春雄「心中—その詩と真実」—『季刊　歌舞伎』37号1977年７月◆カブキという語の奇妙な用例『季刊　歌舞伎』38号1977年10月◆文学翻訳と文体輸入—シェイクスピア詩文体のドイツ語化の歴史—　丸善『学鐙』1977年12月◆ペーター・シュタイン—変動の時代のドイツ演出家—『テアトロ』1978年６月◆時間の翻訳は可能か—翻訳劇上演のたびに思う疑問—『毎日新聞』（夕刊）1979年12月◆スイスの「日本国皇帝」—伝統もつ奇祭「日本人劇」『毎日新聞』（夕刊）1980年３月◆ナチズムの暗い影のもとで——九三〇年代のベルリン演劇—　早川書房『悲劇喜劇』1981年３月◆新しい能舞台への道—金森馨の仕事に思うこと—　日本劇場技術協会『劇場技術』48号　1981年４月◆座談会AMD研究会討論記録　十八世紀ヨーロッパ演劇研究（一）〈俳優について〉　AMD編集発行『あ・えむ・で　演劇論研究７』1981年12月◆かさなる因縁と期待—五月のシラー劇上演—劇団俳優座『コメディアン』1983年２月◆複眼的シラー劇演出—俳優座「メアリ・スチュアート」—『テアトロ』1983年７月◆上等の料理の味—ブルク劇場「三文オペラ」—『テアトロ』 1983年８月◆ウィーン風味のベルリン料理—ブルク劇場の「三文オペラ」—文化総合出版『泉』1983年９月◆中空に浮かぶ宇宙観ドラマ—東京演劇アンサンブル「ガリレイの生涯」—『テアトロ』1986年５月◆無責任な神々と不幸な善人—俳優座「セツアンの善人」『テアトロ』1986年７月◆不正を憎む情熱—フリードリッヒ・シラーについて—「たくらみと恋」あらすじ　シラー劇場・ベルリン国立演劇場公演「たくらみと恋／信仰　愛　希望」公演パンフレット　1988年11月◆奇をてらわずに丁寧な演出—シラー劇場「たくらみと恋」を見て—『朝日新聞』（夕刊）　1988年11月◆次なる幕・次なる世代の

ために　西洋比較演劇研究会『西洋比較演劇研究会　会報』 1989年７月◆一世紀の短さを考えさせる劇―「海の夫人」を観て―　劇団俳優座『コメディアン』 1990年２月◆ミュンヘンに音楽がよく似合う　バイエルン国立ゲルトナープラッツ劇場日本公演パンフレット　1990年６月◆非現実的演劇芸術を追求した人々―新劇を中心とする三田の演劇人たち　『三田の文人』慶應義塾大学文学部開設百年記念「三田の文人展」実行委員会編（丸善）所収1990年11月◆〔追悼　宇野信夫〕下町情緒の心理学　三田文学会『三田文学』28号　1992年２月◆日本近代劇の青春時代―慶応義塾大学図書館と小山内文庫―　早川書房『悲劇喜劇』1994年11月◆小山内薫が見たヨーロッパ演劇―築地小劇場七〇年目に出現した演劇絵葉書の群とその価値―　丸善『学鐙』 1995年５月◆小山内薫と演劇絵葉書　演劇出版社『演劇界』1995年10月◆絵葉書が語る新劇史のひとこま―続・小山内薫が見たヨーロッパ演劇　丸善『学鐙』1995年10月◆リーダーたちの研究心劇団俳小「上杉鷹山」公演パンフレット　1995年11月◆小山内薫の開拓の努力を再発見　『聖教新聞』1995年11月◆ビデオ「“絵葉書の語る”小山内薫が見たヨーロッパ演劇」―「小山内薫とモスクワ芸術座」―『シアターX』1995年12月◆「群盗」フリードリヒ・シラー／「貴婦人帰郷に帰る」フリードリヒ・デュレンマット／「アンドラ」マックス・フリッシュ／タボリ／シュタイン　岩淵達治編『現代演劇101物語』（新書館）所収　1996年４月◆ささやかな冒険と発見の日々　早川書房『悲劇喜劇』 1996年８月◆スタニスラフスキーと小山内　『聖教新聞』 1997年12月◆モスクワ芸術座と小山内薫（第68回例会報告　1997・12・６）　西洋比較演劇研究会編『会報　西洋比較演劇研究会』第20号（1998春）　1998年５月◆知的刺激交換の喜びと価値―西洋比較演劇研究会が私にあたえたものについて　西洋比較演劇研究会編『会報　西洋比較演劇研究会』第22号　1999年５月◆シェイクスピア研究の貴重な資料　―『どさ回りのハムレット』訳者からのメッセージ―　劇団俳小による『罰せられた兄殺し』の池袋芸術劇場小ホールでの再演パンフレット　1999年９月◆まだ若い演劇研究　西洋比較演劇研究会　会報　第24号　2000年９月

6．スイス関係

6.1．スイスの歴史と文化

テルは生きている—スイス史へのいざない—『トラベルブック　スイスの旅』（世界文化社）所収　1970年12月◆龍とマイヤー婦人　『Unter den Linden（木陰のドイツ語）』（朝日出版社）所収　1971年6月◆ルツェルンによせて—音楽など無くてもよい，しかし…—　NHK交響楽団『ふぃるはーもにー』　1972年8・9月◆民主主義の幸福な独裁—スイスの憂鬱—（付：ヘールベルト・マイヤー「デモクラシーはむずかしい」[訳]）文芸春秋社『諸君！』1973年11月◆スイス—歴史に学んだ小国の知恵—／ヴィルヘルム・テル　『文化誌　世界の国　14　スイス・オランダ・ベルギー』（講談社）所収　1974年8月◆スイス・アルプスに映じた心の歴史　出版ダイジェスト社『出版ダイジェスト』　1977年9月◆座談会「スイス銀行」完結編　永世中立のスイス国・橋やトンネルに常時地雷が…（深田祐介氏らとの対談）『週刊読売』1978年2月◆龍を退治した英雄の運と不運—ジークフリートとヴィンケルリート—　文化総合出版『泉』26号　1979年11月◆ウィリアム・テルを追って　ルツェルン　アルトドルフ／スイスの歴史／オーストリアの歴史　世界文化社『すてきな旅　世界文化シリーズ　2　スイス・オーストリア』1980年？月◆刺激みちた啓発の書　八木あき子著『理想国スイス』／森田安一著『スイス歴史から現代へ』（匿名書評）　福井新聞社，北日本新聞社他（共同通信社配信）　1980年9月◆フォンデュを生んだ文化　朝日新聞社『週刊　朝日百科　世界の食べもの　スイス・ベネルックス』　1981年8月◆ユニークな英雄としてのテル　『藤沢市民会館開館15周年記念公演オペラ　ウィリアム・テル』プログラム　1983年10月◆アルプスの神秘—恐怖心から科学的探求へ—　『聖教新聞』　1983年12月◆絵だより　矢はリンゴと観客の心を射た（絵と文）婦人之友社『婦人之友』1984年2月◆〔外国人の生きがい・スイス〕　明日を信じにくい体質の人びと　朝日新聞社『朝日ジャーナル　増刊号　ライフスタイル革命』1984年6月◆〔マイ・トラベル〕アンドレアス老人

山陰新聞社他（共同通信配信）1986年7月◆スイスに旅する人のためのスイス・話のたね—歴史・社会・文化—『ブルーガイド海外版11　スイス』（実業之日本社）所収　1988年1月◆山国に生きるための知恵—不思議の国スイスとスイス人たち—　三修社『基礎ドイツ語　臨時増刊号』1989年7月◆美しく峻厳な山々に囲まれて育まれた潔癖性がウィリアム・テルを生んだ（草柳大蔵氏との対談）キャセイ・パシフィック『Traveller』1990年1・2月◆それでもウィリアム・テルは生きている　ダイヤモンドプレス『DC Gold Card HOLDERS』1991年春号　1991年2月◆満七百年目のスイス　日本銀行情報サービス局『にちぎん　クオータリー』夏季号　1991年6月◆小国自治の伝統—スイス建国七百年に思う—『聖教新聞』1991年6月◆景観の陰にひそむ不安　—スイス建国七百年の式典で—『読売新聞』（夕刊）1991年8月◆岐路に立つスイス—建国700年の祝いに影さす悩み—　社団法人企業研究会『Business Research』807号　1991年9月◆建国七百年のスイス—アルプスの湖と草原を舞台にした祭典—慶應義塾大学『三田評論』1991年10月◆祝祭劇の国スイス　新潮社『新潮』1991年10月◆建国七百年を祝う日々のスイスにて（上）—リギのロミオとジュリエット—　丸善『学鐙』1991年10月◆ルソーとジュネーブ『ザ・ビックマン』1991年10月◆建国七百年を祝う日々のスイスにて（下）—湖畔の草原と山中の峠の祭—　丸善『学鐙』1991年11月◆山の国スイス　建国700年の年輪（ランチタイム・エッセー）　時事通信社『世界週報』1991年11月◆EC統合に翻弄されるスイス　中央公論社『中央公論』1993年5月◆牧歌と現実　—アルプスの峠，スイスの立場—　慶應義塾大学通信教育部『三色旗』1993年5月◆金の装身具からの連想　かまくら春秋社『かまくら春秋』287号　1994年3月◆それでもスイス人はウィリアム・テルを愛する　『朝日新聞』（夕刊）1994年6月◆スイス・アルプスの冬の夜祭り　慶應義塾大学通信教育部『三色旗』1996年2月◆スイスの中立—その栄光と苦悩—　住友商事株式会社広報部『NEXTAGE』49号　1997年2月◆公開シンポジウム「現代スイスを問う」（同年3月4日開催のシンポジウム記録）刀水書房『刀水』No.3　2000年5

月◆アルプスの風景の一部となったスイスの家の形／ヨーロッパ東西南北の縮図のような国の家屋　講談社『ヨーロッパの家　3』2000年9月◆シュピーリと山の娘ハイジ　―生きがいの見いだし方を教える物語―『聖教新聞』2001年2月

6.2. スイス文学

チューリヒにて　ハリー・ハラーの影　新潮社『新潮世界文学37　ヘッセII』　月報　1968年11月◆シュウィッツェルテューチュ　―アルプスの国の言葉と文学―　三修社『基礎ドイツ語　会報』9号　1968年12月◆〔研究ノート〕中立国の作家の精神　『朝日新聞』（夕刊）　1969年6月◆スイス作家の苦悩　精神の自由求め（「慶」の記号で匿名）『朝日新聞』（夕刊）1970年9月◆〔近代世界文学鑑賞〕ケラー（3回に分載）『公明新聞』（夕刊）　1974年4月◆スイス文学と中立政策　神話化へ厳しい抵抗　『公明新聞』（夕刊）　1974年11月◆自国語をもたない小国（スイス）　筑摩書房『文芸展望』　1976年10月◆スタール夫人とヴィーラント　―スイス文学とイギリス―　日本独文学会『ドイツ文学』69号　1982年10月◆モザイックの国の文学　―スイス文学の像を求めて―　東大由良ゼミ準備委員会編『文化のモザイック　第二人類の異化と希望』（緑書房）所収　1989年9月◆山の魔力／ロッテンマイヤー女史の理想　NHK取材班ほか『アルプスの少女ハイジ・夢紀行』（日本放送出版協会）所収　1990年4月◆スイス文学　『新潮世界文学辞典』（新潮社）所収　1990年4月

7. エゴン・フリーデル Egon Friedel 関係

誤植が生んだ謎の作家とその正体―スタンダールと日本人作家ハレス？―『北葉』17号　1980年5月◆幻と消えた日本人作家　―ウィーン風ユーモアの一例―　丸善『学鐙』　1984年5月◆西洋的合理主義への挽歌　―フリーデルの『近代文化史』―　丸善『学鐙』　1985年9月◆近代文化史を山頂で思う　丸善『学鐙』　1986年10月◆近代史とフリーデル　―演劇人の目で歴史の意図見抜く―『聖教新聞』　1987年7月◆幻の日本人作家

1　—フリーデルの評論『ハレス』とその顚末—　みすず書房『みすず』321号　1987年10月◆幻の日本人作家　2　—フリーデルの評論『ハレス』とその顚末—　みすず書房『みすず』322号　1987年11月◆幻の日本人作家3　—フリーデルの評論『ハレス』とその顚末—　みすず書房『みすず』323号　1987年12月◆アップで下る　—友情・翻訳・外来語についての三題話—　郁文堂『BRUNNEN』299号　1988年1月◆文化史の悲喜劇　—近代文化史の舞台裏—　出版ダイジェスト社『出版ダイジェスト』1988年3月◆進歩という幻想　—フリーデルを訳して—　『聖教新聞』1988年6月◆文化史のドラマトゥルギー　—フリーデルと『近代文化史』—　三田文学会『三田文学』15号秋季号　1988年11月◆文化史と学術論文　日本独文学会『ドイツ文学』37号　1991年10月

8．ドイツ関係

8.1．ドイツとドイツ文化（啓蒙的な概説）

レイヤーティーズとハル王子　日本ゲーテ協会『べりひて』14号　1973年10月◆青春の愛と憎しみのドラマ—シラーの戯曲『群盗』—　三修社『基礎ドイツ語』1974年3月◆ドイツとドイツ人／ドイツその詩と真実　旅行者のためのドイツ史／旅のこぼれ話　『ブルーガイド海外版9　西ドイツ』（実業之友社）所収　1983年3月◆アイヒェンドルフの旅と森　国書刊行会『ドイツ・ロマン派全集　第6巻』月報3　1983年9月◆定義できない国の定義を求めて—消去法によるドイツ像—　吉野文六監修『ヨーロッパの不死鳥ドイツ』（三修社）所収　1983年10月◆シラーとスイス　三修社『基礎ドイツ語』　1984年6月◆ドイツとドイツ人／ドイツ　その詩と真実　旅行者のためのドイツ史／旅のこぼれ話（改稿）『ブルーガイド海外版9　西ドイツ』（実業之友社）所収　1990年7月◆ゲーテとファウスト，話の種　藤沢市民オペラ「ファウスト」プログラム　1990年10月◆希望の力で苦しみを克服した詩人と作曲家—シラーとベートーヴェンについての4つの話—　若杉弘指揮・藤沢市民交響楽団『第九』特別演奏会プログラム　1991年12月◆世界花物語13　ドイツ　リンデの花　同朋舎出版『花時間』

55号　1996年4月◆ゲーテの魅力を探る　江ノ電沿線新聞社『江ノ電沿線新聞』285号　1999年5月

8.2.「ドイツ文学へのいざない」(日本放送協会『NHKテレビドイツ語講座』連載)

1ゲーテ『若きヴェルターの悩み』1986年4月◆2シラー『ヴィルヘルム・テル』―自由と理想を求めて―　1986年5月◆3ハイネの『ローレライ』に寄せて　1986年6月◆4レッシングとその時代　1986年7月◆5シュピーリ『ハイジ』　1986年8月◆6ヘッセの苦悩と慰み　1986年9月◆7三人の劇作家たち　―ウィーンの舞台―　1986年10月◆8影をなくした男の影の意味　1986年11月◆9カフカと不条理の世界　1986年12月◆10トーマス・マン『魔の山』　1987年1月◆11ケストナーとブレヒト　1987年2月◆12ふたたびゲーテにもどって　1987年3月

8.3.「ドイツ文化歳時記」(日本放送協会『NHKテレビドイツ語講座』連載)

1ドイツはどこにあるのか　1987年4月◆2　5月に咲く恋の花　1987年5月◆3　6月の雨と火祭り　1987年6月◆4　オーストリアの歴史　1987年7月◆5　スイス・アルプスの山々　1987年8月◆6　大地が黄金色に染まる頃　1987年9月◆7　ドイツの街道あれこれ　1987年10月◆8　ドイツに冬は早く来る　1987年11月◆9　クリスマスの季節　1987年12月◆10　いざ，新しき年に　1988年1月◆11　真冬の陽気さ　1988年2月◆12　本当の春は，すぐそこに！　1988年3月

8.4.「翻訳独文法」(日本翻訳家養成センター『翻訳の世界』連載)

1　直訳口調からの脱出をめざす　1983年12月◆2　名詞複数形の処理　1984年1月◆3　名詞中心の文章を動詞中心の文章に読みほどく　1984年2月◆4　訳者泣かせの複合名詞に挑戦　1984年3月◆5　人称代名詞のあつかいかた　1984年4月◆6　指示代名詞の注意点と不定代名詞man

1984年5月◆7　形容詞を名詞にとけこませる　1984年6月◆8　比較級・最高級対策を考える　1984年7月◆9　名詞化された形容詞　1984年8月◆10　少々面倒な副詞　1984年9月◆11　否定の罠　1984年10月◆12　時をもつ言葉　1984年11月◆13　時制の対応の原則　1984年12月◆14　定形の位置　1985年1月◆15　直接話法か間接話法か　1985年2月◆16　つとめてやわらか目に，接続法第二式　1985年3月◆17　文化の差異を知る手掛り—比喩—　1985年4月◆18　名詞文と動詞文　1985年5月◆19　補遺篇1　文法の束縛を脱して　1985年6月◆20　補遺篇2　総まとめ　1985年7月

9．メルヘン関係

白雪姫ショック—メルヘンについての往復書簡—付：ローベルト・ワルザー「いばらひめ」(訳)　文化総合出版『泉』30号　1980年11月◆森と山とメルヘンと—自然・伝説・詩情—　西尾幹二編『ドイツ文化の基底』(有斐閣)所収　1982年4月◆終わりのないエンデ—『はてしない物語』日本語版刊行によせて—　ほるぷ『ほるぷ図書新聞』　1982年7月◆現実と非現実とのかなた『はてしない物語』　産経新聞社『週刊サンケイ』1982年7月◆九十四歳の白雪姫（メルヘン余談）　文化総合出版『泉』37号　1982年8月◆現代日本におけるメルヘン　『日本文化会議』66号　1983年4月◆森のファンタジー　—危険と救いが宿る場所　グリム童話の舞台としての森—　資生堂『INOUI』7号　1988年7月◆グリム童話の書き変え　偕成社『MOE』　1988年9月◆森のファンタジー　偕成社『MOE』　1989年1月◆グリム・メルヘン・アラカルト　偕成社『MOE』　1989年1月◆グリム兄弟とメルヘン　日本児童文学学会編『グリム童話研究』(日本図書)1989年10月◆〈夢〉と〈幻想〉の記号　丸栄陶業株式会社『KAPALA』2号　1990年6月◆（インタビュー記事）　マガジンハウス『クリーク』　1990年5月◆幻想における善と悪の表象（1999年度藝文学会シンポジウム）　慶應義塾藝文学会『藝文研究』78号　2000年6月

10. 慶應義塾関係

慶應の前衛を分析する　前衛―それは異端の別称なのだろうか　『慶應義塾大学新聞』2号　1962年11月◆西ドイツの大学で　『慶應義塾大学報』1967年6月◆〔幻の門〕イメージ（鈍寿庵＝匿名時評）『三田新聞』1967年7月◆〔幻の門〕食堂値上げ（匿名時評）『三田新聞』1967年10月◆随想 現代のスフィンクスの謎　『三色旗』　1968年4月◆塾員訪問38 内村直也君を訪ねて（インタビュー）『塾』　1968年6月◆「文学」と文学『三色旗』　1969年5月◆海の壁をのりこえること　『三田評論』　1969年6月◆語学教育だけではない　『三田評論』　1970年2月◆コントラストに満ちた夏に　――通信教育生への遅すぎた便り―　『三色旗』　1970年2月◆気味悪い沈黙的行動　『慶應塾生新聞』　1970年6月◆私の山恋い　『慶應通信』　273号　1970年12月◆文学　―テキストを生かすために―　『三色旗』　1971年5月◆外国文学の辞典　『三色旗』　1971年11月◆ヨーロッパの新しい像を求めて　『慶應塾生新聞』　1971年12月◆文学を学ぶということについて　『三色旗』　1972年5月◆友情という名の双面神　―チューリヒからの便り―　『塾』　1973年4月◆文学　―テキストを生かすために―『学習のすすめ』　1973年6月◆『近代ドイツ演劇』への招待　『三色旗』　1973年8月◆（匿名寸言）　鶏助　『慶應義塾大学報』　1974年4月◆新版『文学』の構想と構造　『三色旗』　1974年12月◆シルバーシートへの疑問―専門的知識をもたない平均的一市民の立場から見た福祉と負担の問題―『三田評論』　1975年5月◆知られざるファウスト邦訳　『国文学科報』1975年9月◆なぜ語学だけが　―教養と実用のジレンマ―　『塾』　1975年12月◆我が座右の辞書　独語辞書　『慶應義塾大学報』　1976年4月◆父と子　―愛情と闘争―　文学作品を通してみる父子の関係　『塾』　1977年4月◆〔テキストの周辺〕文学のトポス　『三色旗』　1977年5月◆新著余瀝『スイス・アルプス風土記』『三田評論』　1977年11月◆（座談会）文献の調べ方（細野公男・山田隆一・関場武・浜田敏郎氏との座談）『三色旗』1977年12月◆わが青春の中の三田と早稲田　―野尻抱影氏ほかの早稲田人と私―　『三田評論』　1978年8・9月◆常識と前提　『三色旗』　1978年10

月◆外国語とつきあう方法 『塾』 1979年2月◆アルプスの美を発見した青年 『三色旗』 1979年7月◆三人閑談 山岳書（島田巽，山崎安治氏との鼎談）『三田評論』 1979年8・9月◆新著余瀝『ウィリアム・テル伝説』『三田評論』 1979年12月◆書斎の内外（1）困ったこと 『塾』 1980年4月◆スポーツは神聖で非政治的か（象＝匿名時評）『三田評論』 1980年5月◆オリンピックとピンポン（象＝匿名時評）『三田評論』 1980年6月◆書斎の内外（2）日本のこと 『塾』 1980年6月◆〔ことばのサロン〕メルヘン 『塾』 1980年7月◆書斎の内外（3）有難いこと 『塾』 1980年8月◆書斎の内外（4）講演のこと 『塾』 1980年10月◆書斎の内外（5）物書くこと 『塾』 1980年12月◆書斎の内外（6）山登ること 『塾』 1981年2月◆もう一つの大学生活 ―課外活動のすすめ― 『慶應義塾大学報』 1981年5月◆《小泉信三記念講座》外国語喜怒哀楽 ―外国語を友にする方法― 『三田評論』 1981年6月◆〔テキストの周辺〕文学のトポス 『学習のすすめ』 1982年5月◆東極としての日本 ―滞欧雑感― 『三色旗』 1982年6月◆新著余瀝 『メルヘン案内 グリム以前・以降』『三田評論』 1982年7・8月◆夏期スクーリング課外講座 はなし言葉の実験 『慶應通信』 1982年8月◆だれのためのオストラキスモスか（敬＝匿名時評）『三田評論』 1982年10月◆常識と前提 『三色旗』 1982年10月◆朗読のすすめ ―学習と思考の活性化のために― 『三色旗』 1982年12月◆鼎談 話し言葉の問題（鈴木孝夫氏・岩崎英二郎氏との対談）『三色旗』 1982年12月◆劇場国家と文化 『三田評論』 1983年2月◆芸文学会シンポジウム 戦後文学と私（白井浩司，安東伸介，桧谷昭彦，鍵谷幸信，村松暎，若林眞氏との討論。1982年12月11日のシンポジウム）『三田評論』 1983年2月◆寸言 プラスマイナス 『三色旗』 1983年2月◆講義にともなう苦心と喜び 『塾』 1983年2月◆外国語喜怒哀楽（1981年6月号『三田評論』から転載）『別冊塾生案内 大学はかくありたい』 1983年2月◆強い陽光を浴びた闇（象＝匿名時評）『三田評論』 1983年6月◆日本が円であるならば 『三色旗』 1983年11月◆徒労と退屈の季節（象＝匿名時評）『三田評論』 1984年11月◆〔慶應義塾学

内スケッチ〕『慶應義塾大学報』 1984年4月（以下，1986年2月まで2年間にわたって計12回スケッチを連載）◆週六日の家庭教師 『塾風』 1984年4月◆阿部昭著 言葉ありき 『慶應キャンパス』 1984年4月◆委員としての二年間 『三色旗』 1984年6月◆座談会 東と西（桧谷昭彦，佐藤一郎，川本邦衛，高宮利行，高山鉄男氏と）『三田評論』 1984年8・9月◆民主主義は遅々として歩む —アルプスの山々と私のスイス学— 『三色旗』 1984年10月◆テキストの周辺 近代ドイツ小説 『三色旗』 1985 2月◆三人閑談 山の楽しみ（服部謙太郎，向井重陽氏との鼎談）『三田評論』 1985年3月◆書評 河竹登志夫著『先駆ける者たちの系譜』『パピルス』 1985年5月◆表紙のキャンパス・スケッチを終えて 『慶應義塾大学報』 1986年1月◆藝文学会シンポジウム 昔話・伝説・メルヘンの諸相（西村亨，伊藤清司，高宮利行，藤田祐賢，牛場暁夫，桑原三郎，山岸健氏との座談）『三田評論』 1986年5月◆日本語とドイツ語 —通信教育部生へのアドバイス— 『三色旗』 1986年6月◆ねぎらいの喜び 『慶應通信』468号 1987 3月◆われ思う（15）山・人・本（島田巽氏インタビュー）『三田評論』 1987年7月◆先生の言葉 自分を見る自分 『慶應キャンパス』 1987年11月◆ベートーヴェンから星空へ 『三色旗』 1988年11月◆朗読のすすめ 『三色旗』 1988年12月◆鼎談 話し言葉の問題（岩崎英二郎，鈴木孝夫氏と）『三色旗』 1988年12月◆相良守峯氏を悼む 『三田評論』 1990年3月◆非政治的演劇芸術を追求した人々 —新劇を中心とする三田の演劇人たち— 慶應義塾大学文学部開設百年記念「三田の文人展」実行委員会編『三田の文人』 1990年11月◆春夫の自画像 『三田評論』 1991年2月◆言葉の違いをこえて 『塾風』 1991年4月◆建国七百年のスイス 『三田評論』 1991年10月◆思考と体験のバランス（小泉信三賞選評）『三田評論』 1992年1月◆自分自身を見る姿勢（小泉信三賞選評）『三田評論』 1993年1月◆大きすぎない期待を持って『塾風』 1993年4月◆中距離レースの走り方（小泉信三賞選評）『三田評論』 1994年1月◆山稜の読書家との別れ —追悼 島田巽さん— 『三田評論』 1994年6月◆『三田文学』編集長 —静かな男の力強さ 古屋健三

君―『塾』1994年12月◆観念から現実へ（小泉信三賞選評）『三田評論』1995年1月◆英雄の登場しない世界史『慶應通信』562号 1995年1月◆資料を作るのも文献収集の一方法 ―文献との出会い方いろいろ―『三色旗』1995年5月◆三人閑談 グリム童話を知っていますか（小澤俊夫，桑原三郎氏との鼎談）『三田評論』1995年7月◆学習のすすめ 文学の学び方『三色旗』1995年11月◆体験を超える力『三田評論』1996年1月◆スイス・アルプスの冬の夜祭り『三色旗』1996年2月◆小山内薫が見たヨーロッパ演劇 ―慶応義塾図書館で発見された絵葉書が証言することがら―『三田評論』1996年3月◆文学の学び方 慶應義塾大学通信教育部編『学習のすすめ』1996年4月◆佳作の価値（小泉信三賞選評）『三田評論』1997年1月◆新著余瀝『日本アルプス―見立ての文化史』『三田評論』1997年11月◆新著紹介『日本アルプス―見立ての文化史』『三色旗』1997年12月◆自問自答する高校生（小泉信三賞選評）『三田評論』1998年1月◆モスクワ芸術座百周年記念「モスクワ芸術座と小山内薫」『慶應義塾大学報』1998年1月◆〔慶應義塾学内スケッチによる表紙〕『三色旗』1998年4月（以後1999年3月まで計12回スケッチを連載）◆表紙絵を描きながら思うこと『三色旗』1998年7月◆一五枚の世界の設計（小泉信三賞選評）『三田評論』1999年1月◆読書日記「三田文学」新旧談義『三田文学』No.56 1999年2月◆「教員紹介」『三色旗』1999年6月◆「学び方を学ぶことについて」『三色旗』1999年12月◆文学部に結集する知（シリーズ「義塾の20世紀」）『三田評論』2000年12月◆若き血の燃える時（小泉信三賞選評）『三田評論』2001年1月◆レンブラントの七月『三色旗』2001年7月

11. 日本独文学会関係

学会規模拡大と情報化時代の学会誌 日本独文学会『ドイツ文学』50号 1973年3月◆第35回授賞論文審査経過報告 ドイツ語学文学振興会『ひろの』35号 1996年10月

12. 回想

忘れ難い人々の肖像（上）（群像） 丸善『学鐙』 1990年5月◆忘れ難い人々の肖像（中）（群像） 丸善『学鐙』 1990年6月◆忘れ難い人々の肖像（下）（群像） 丸善『学鐙』 1990年7月◆短編投手（阿部昭氏）『阿部昭全作品 第六巻』（福武書店）月報7 1984年8月◆海辺の作家・阿部昭 —私小説家との交際からのエピソード—（阿部昭氏） 三田文学会『三田文学』26号 1991年8月◆手紙の真相（阿部昭氏）『阿部昭集 第九巻』（岩波書店）月報12 1992年5月◆雷雨が演出した決断（江藤淳氏） 三田文学会『三田文学』59号 1999年11月◆ことわりなしのプロフィール（遠藤周作氏） 三田文学会『三田文学』58号 1999年8月◆クゥルツィウス（大野俊一訳）『現代ヨーロッパにおけるフランス精神』（みすず書房）あとがき（大野俊一氏）（校正の段階に入る直前で大野氏が倒れ，急遽私が校正を担当することになった。校正作業の期間中に大野氏が死去したため，追悼文のつもりで「あとがき」を草した。）1980年5月◆サンフランシスコの夜（柏原兵三氏） しんせい会編『NS叢書 柏原兵三の人と文学』（三修社）所収 1974年4月◆山人のドラマの名脇役 —小林基子さんとの不思議な再会の記—（小林基子さん。表紙の絵も） 山ぼうしの会『レクイエム 小林基子さん』 1994年10月◆若きアルピニストの沈黙（坂口達雄君の追悼文集） 慶應義塾大学アルペンフェライン山岳会発行『ケルン 一人の山を愛した友に捧げる』 1979年9月◆米寿のサイン —相良守峯氏の無言のはげまし—（相良守峯氏） 鶴岡市発行『閑情淡遠』（鶴岡市名誉市民 相良守峯先生追悼集） 1991年6月◆佐原六郎先生逝去（佐原六郎氏） 慶應義塾幼稚舎同窓会『慶應義塾幼稚舎同窓会報』 1989年3月◆中上健次を描いたわけ（中上健次氏） 三田文学会『三田文学』春季号 1996年5月◆西脇順三郎氏の酒席談義 —日記をつけない男の悔恨—（西脇順三郎氏）『北葉』31号 1982年9月◆西脇順三郎氏の酒席談義 —日記をつけない男の悔恨—（西脇順三郎氏）（『北葉』からの転載）慶應義塾三田文学ライブラリー発行『回想の西脇順三郎』 1984年3月◆野尻抱影氏との不思議な縁 —年齢差を超越した友情の一形態—（野尻抱影氏）

『泉』20号　1975年5月◆半世紀の年令差（野尻抱影氏）　中央線社『中央線』16号　1978年9月◆ドイツ語のうわごと　―星人・野尻抱影氏のことども―（野尻抱影氏。数年後に『Laterne』掲載文が集成された際に組み直された）　同学社『Laterne』40号　1978年9月◆英語教師から星の人に至る道筋　―野尻抱影：人と星と英文学―（野尻抱影氏）　研究社『英語青年』　1989年6月◆天文学者野尻抱影のロマンチシズム（野尻抱影氏）　安田火災海上保険株式会社『生きる』（特集：宙）　1990年1月◆（解説）天文学者野尻抱影のロマンチシズム（野尻抱影氏。上記『生きる』掲載のものに加筆修正したもの）　野尻抱影著『星まんだら』（徳間文庫）所収　1991年7月◆俳句詠む医師（別府鈴兄氏）　俳句雑誌『波』　1982年8月◆デンデンムシムシ（ヴーテノー氏）（のち集成版に組み換えられて再録された。）　同学社『Laterne』12号　1965年5月◆悪魔山の天使教授　―エンゲル氏，谷川岳に登る―（ウルリヒ・エンゲル氏）　郁文堂『Brunnen』1976年4月◆ムシュクの鎌倉散策（アドルフ・ムシュク氏）　同学社『Laterne』49号　1983年2月

13. 山岳関係

13.1. 創文社『アルプ』掲載

Q　クヴェレ（Quelle 泉）／Y　山仲間（付スケッチ1点）　1978年12月（特集：山のABC）◆冬の夜に雪を求めて　1979年2月◆山をかぞえる　1979年8月◆山で死んだオフィーリア　1980年3月◆Q　Pizzo Quadro, Piz Quattervals（ピッツォ・クアードロとピツ・クアテルバルス）／S　水晶峠／X　Xylophagos, Xykos Kalo（クシュロパゴスとクシュロス＝カロ）　1980年5月◆冬とは幽霊の季節　1981年2月◆植物音痴（付スケッチ1点）　1981年7月◆青年野尻抱影のスケッチブック（1）（付スケッチ1点）　1981年8月◆青年野尻抱影のスケッチブック（2）　1981年9月◆アルプスの失楽園　1981年10月◆アルプとの別れ　1982年9月◆ラインの晩秋（付スケッチ2点）　1982年10月◆山は，人それぞれに　1983年2月（最終号）

13.2. 山と溪谷社『山と溪谷』掲載

対談 穂高岳と北岳の魅力を語る　山村正光氏との対談　1974年７月◆雨と霧と雲を友にする山旅　1975年６月◆小説の岩壁に登る男たち　1976年１月◆日本の峠アルプスの峠　1976年11月◆スイス・アルプスの地図と山 1977年11月◆ラインハルト・メスナー　死の領域にて　酸素マスクなしのエベレスト登頂（訳）　1978年10月◆ラインハルト・メスナー　絶頂への道　チョモランマ単独無酸素登頂（訳）　1981年１月◆随想　山岳地図のロマンス　1983年９月◆〔新書紹介〕近藤等著「アルプスの名峰」　1984年６月◆ラインハルト・メスナー　生還―死の地帯，八〇〇〇メートル峰を超えて（訳）　1987年５月◆〔インタビュー〕「超人」ラインハルト・メスナーに聞く（訳）　―私とヒマラヤ八〇〇〇メートル峰（上）―　1987年７月◆〔インタビュー〕「超人」ラインハルト・メスナーに聞く（訳）―私とヒマラヤ八〇〇〇メートル峰（下）―　1987年８月◆〔インタビュー〕ラインホルト・メスナー「夢を砕かれた氷解の裂け目」（訳）　1995年10月◆山と峰のかぞえ方　1996年５月◆「山―随想」と「山の絵本」 1997年10月

13.3. 中日新聞東京本社『岳人』掲載

山からの絵葉書　―ウンターバハホルン―（画と文）　1973年12月◆スイス・アルプスの魔性たち　1974年９月

13.4.1. 日本山岳会機関誌『山岳』（年刊）掲載

山村正光「車窓の山旅・中央線から見える山」　1985年12月◆藤本一美・田代博編著　「展望の山旅」　1987年12月◆「空撮・世界の名峰　山田圭一作品集」　1988年12月◆アルッヴァレズ　「山男にみる生き方の研究」 1990年12月◆〔図書紹介〕　ヴィルフラム・マンツェンライター著「日本アルピニズムの社会的構造」　2000年12月

13.4.2. 日本山岳会機関紙「山」(月刊) 掲載

〔図書紹介〕 近藤等著「アルプスの空の下で」 1972年11月◆日本山岳会の先輩たち (似顔絵) 1976年3月◆薄曇りのち晴れ 山岳絵画展を終えて 1977年4月◆〔図書紹介〕「グリンデルヴァルトの山案内人」 1977年7月◆JACに伴走した星人—野尻抱影氏の逝去に寄せて 1978年3月◆(各務良幸氏の横顔スケッチ) 1978年7月◆「魅惑する山々」 1978年9月◆鳥海山高山植物探索行 (付スケッチ1点) 1979年12月◆故野尻抱影氏のスケッチブック 1980年4月◆〔図書紹介〕 山を描くアルピニストたち 1980年8月◆〔図書紹介〕「アルプスを描いた画家たち」 1981年6月◆〔図書紹介〕 三上正治 「ふみあと」 1982年4月◆山岳図書を語る集い —吉沢一郎氏の「アメリカの山岳図書」の話 (スケッチ1点付き) 1982年5月◆ハラー「スイス詩の試み」 1982年7月◆〔図書紹介〕 川喜多二郎・加藤千代「神話と伝説の旅」 1982年8月◆(加藤泰安氏の似顔絵) 1983年7月◆シュタイニッツァー「日本山行」 1983年10月◆(カナダ山岳会元会長夫妻の似顔絵) 1984年1月◆〔図書紹介〕 バイヤット「ギネスワールド 山と登山」 1984年4月◆〔図書紹介〕 シュトルテ「丹沢夜話」 1984年8月◆〔図書紹介〕 佐貫亦男のチロル日記 1984年9月◆〔図書紹介〕「藤江幾太郎表紙画集」 1985年3月◆〔図書紹介〕「空から見た信州の道」 1996年10月◆「山の歌となった劇中歌『街の子』」 1996年11月◆〔図書紹介〕「カラコルムにおけるイタリア・アルピニズム」 1996年12月◆〔図書紹介〕 The Himalayan Journal, vol.52. 1996 1997年2月◆〔図書紹介〕 ゲーデケ著『アルプス4000m峰ガイド』 1997年9月◆〔図書紹介〕 穂苅三寿雄・穂苅貞雄「播隆」(増訂版) 1997年12月◆〔図書紹介〕 Around the Roof of the World 1998年9月◆〔図書紹介〕 BERG 2000 2000年3月◆〔図書紹介〕 山寺仁太郎著『甘利山』 2001年10月

13.5. 研究・解題

辻村伊助『スウィス日記』/『ハイランド』(大修館書店) 日本山岳会編

『覆刻 日本の山岳名著 解題』 1975年10月◆高島北海『欧洲山水奇勝』全二巻（大修館書店） 日本山岳会編『新選覆刻 日本の山岳名著 解題』1978年9月◆専門語校閲〈登山〉『ジーニアス英和大辞典』（大修館書店）2001年4月

13.6. その他

山登りの人間学 山の本の世界（島田巽，近藤信行，大森久雄氏との座談会）『図書新聞』 1978年8月◆第3章 山の宗教／第4章 山の音楽／第5章 山の美術 山岳研究会編『登山ハンドブックシリーズ 4 山の心』（ベースボール・マガジン社） 1979年2月◆驚嘆すべき足跡の深さと広さ―「欧州山水奇勝」に思う― グラナダ発行『ガレと高島北海』1979年4月◆ベルギーにまさる広さをもつ地域 『日本登山大系第4巻』（白水社）月報4 1981年1月◆矛盾 自然公園美化管理財団『美しい自然公園』2号 1981年3月◆日本語版刊行にあたって 『山岳の世界』（大修館書店）PRパンフレット 1981年4月◆心の山，現実の山―山を見なかった画家の山の名画― 創文社『創文』 1983年8月◆山岳の事典 大修館書店『言語』 1984年1月◆アルピニズムの行方 ―探求と冒険生んだ西欧近代― 『聖教新聞』 1984年5月◆心なごむ不思議な山群 ―那須岳・那須高原―『山の歳時記 第3巻 北関東・上越―花の山旅』（小学館） 1984年7月◆山岳趣味の事典 大修館書店『言語』（総合特集・辞書への招待） 1985年4月◆カタカナ語に遭難するアルピニスト 大修館書店『言語』 1985年9月◆登山史 ヨーロッパ・アルプス 勝井規和（写真）＋勝井悦子（文）『ヨーロッパ・アルプスの里物語』所収 1987年5月◆アルプス博物誌 近藤信行監修『漢字百話〈山の部〉山・やま事典』（大修館書店）所収 1988年7月◆山の事典 紀田順一郎・千野栄一編『事典の小百科』（大修館書店） 1988年12月◆「アルプス交響曲」とヨーロッパ・アルプス ―R・シュトラウス作品の背景にある，その歴史― NHK交響楽団『フィルハーモニー』 1990年12月◆スイスの山の数をご存知ですか ―山の高さと数について― 地図協会発行『地図の友』33巻

11号　1991年11月◆慰めくれた日本アルプス　『朝日新聞』(名古屋本社版)　1997年7月◆ラスキンと日本のアルピニズム　ラスキン文庫『ラスキン文庫だより』第33号　1997年9月◆私の登山史と登高会　『登高会報』第49号　1997年10月◆解説　川崎精雄著『雪山・藪山』(山と溪谷社)　2000年6月◆ラスキンと日本山岳美の再認識(1)　ラスキン文庫『ラスキン文庫だより』40号　2001年3月◆ラスキンと日本山岳美の再認識(2)　ラスキン文庫『ラスキン文庫だより』41号　2001年9月◆日本山岳会編「山日記」(茗溪堂)掲載◆ヨーロッパ・アルプス　1974年1月◆表紙と挿画(山の形)　1981年1月◆表紙と挿画(山の花)　1982年1月◆表紙と挿画(山の道具)　1983年1月◆表紙と挿画(山の形)　1984年1月◆表紙と挿画(山の形)　1985年1月

14. 児童関係

14.1. 児童合唱曲(作詩)

宮下啓三作詞・川口晃作曲「夜汽車はロケットのように」「村のまつり」音楽之友社『川口晃作曲 夜汽車はロケットのように　子供のための合唱曲集　II』1963年3月◆宮下啓三作詞・川口晃作曲「海へ行こう」「はなび」音楽之友社『川口晃作曲　インディアンの春　子供のための合唱曲集III』1963年5月◆宮下啓三作詞・川口晃作曲「はなび」「夜汽車はロケットのように」「村のまつり」音楽之友社『川口晃作曲　小学生のための合唱曲選集　1』1977年10月◆宮下啓三作詞・青島広志作曲「花火」音楽之友社『教育音楽　小学版』〔別冊付録　たのしい輪唱⑩〕1983年9月◆夜汽車はロケットのように(宮下啓三作詩)『日本合唱名曲シリーズ(児童合唱編)9 青少年(小・中・高校生)のための合唱名曲集』(音楽CD　CD KICG 3029)　1990年?月

14.2. 児童読み物

〔幼稚舎生への贈物〕イレーヌと日本人　―スイスの夏の思い出から―第1話　かっぱ人形とスイスの少女　慶應義塾幼稚舎『仔馬』1968年6

月◆〔幼稚舎生への贈物〕イレーヌと日本人　―スイスの夏の思い出から―　第2話　少女のいのり　慶應義塾幼稚舎『仔馬』 1968年7月◆〔幼稚舎生への贈物〕イレーヌと日本人　―スイスの夏の思い出から―　第3話　消えたマスコット　慶應義塾幼稚舎『仔馬』 1968年10月◆〔幼稚舎生への贈物〕イレーヌと日本人　―スイスの夏の思い出から―　第4話　かっぱのかわり　慶應義塾幼稚舎『仔馬』 1968年12月

15. 地方同人誌関係

15.1. 薊の会発行『あざみ』掲載

めぐりめぐって―野尻抱影氏との出会いから「あざみ」まで―　薊の会『あざみ』2号　1987年12月◆ナラとナガノ　付・スケッチ4点　薊の会『あざみ』3号　1988年12月◆壁と劇作家　薊の会『あざみ』4号　1990年4月◆湾岸でミサイルの飛び交う日々に　薊の会『あざみ』5号　1991年5月◆山の壁と政治の壁　付・スケッチ4点　薊の会『あざみ』6号　1992年4月◆スイスの日本国皇帝　薊の会『あざみ』7号　1993年11月◆大震災と日本人論　付・薊の会講演会風景／小松左京氏像／白井慶次郎像　薊の会『あざみ』8号　1994年4月◆酒仙飄々　薊の会『あざみ』9号　1996年4月◆一度の旅を二倍に楽しむ　薊の会『あざみ』10号　1997年4月◆奈良県は可愛らしい子犬　薊の会『あざみ』11号　1998年4月◆血液型の話　薊の会『あざみ』12号　1999年4月◆牛たちと話す農婦　薊の会『あざみ』13号　2000年4月◆　薊の会『あざみ』14号　2001年4月

15.2. 橿原神宮発行『橿原』掲載

橿原への旅―神社と郷愁―　橿原神宮『かしはら』92号　1988年7月◆仏を兼ねる日本の神々　橿原神宮『かしはら』107号　1993年7月◆奈良県の形と神仏―可憐な子犬に似た形からの連想―　橿原神宮『かしはら』123号　1999年1月

15.3. 石川県小松市・西風舎発行『ぜふぃろす』掲載

西秀隆氏への書簡　『ぜふぃろす』6号　1989年4月◆〔西風が運ぶ随想〕ゲーテにちなむつれづれの記　—1西風の話／2ゲーテの詩を読む—『ぜふぃろす』42号　1993年8月◆〔西風が運ぶ随想〕ゲーテにちなむつれづれの記　—3　タバコとビール—　『ぜふぃろす』43号　1993年10月◆〔西風が運ぶ随想〕ゲーテにちなむつれづれの記　—4　菩提樹の花の香り—　『ぜふぃろす』45号　1994年1月◆〔西風が運ぶ随想〕ゲーテにちなむつれづれの記　—5　21世紀はいつ始まる—　『ぜふぃろす』46号　1994年2月◆〔西風が運ぶ随想〕ゲーテにちなむつれづれの記　—6　風のたより—　『ぜふぃろす』47号　1994年4月◆〔西風が運ぶ随想〕ゲーテにちなむつれづれの記　—7　生産的な迷信と妄想—　『ぜふぃろす』48号　1994年5月

16. 百科事典項目

ドイツ演劇，ゲーテ，シラー，レッシング，ハウプトマン，ブレヒト，フリッシュ，デュレンマット，クライスト，ヘッベル，他　『万有百科大事典　3　演劇・音楽』(小学館)　1974年8月◆ウェルフェル，他　『大百科事典』(平凡社)　1980年◆アルト・ハイデルベルク，カイザーリング，ゲルステンベルク，コッツェブー，マイヤー・フェルスター，ムシュク，ユーゲント様式，イェスナー，クラウス，クレッツ，コルトナー，シャウビューネ，シュタイン，シュトラウス，ドイツ座，ネーエル，フォルクスビューネ，ブルク劇場，ミュラー，ワイゲル　『日本大百科全書』(小学館)　1982年◆スイス文学，ムシュク，ボードマー，ブライティンガー，リーヒナー　『増補改訂　新潮世界文学辞典』(新潮社)　1990年4月◆シャミッソー　『世界人物逸話大事典』(角川書店)　1996年2月◆ゴットヘルフ，デュレンマット，ホーホヴェルダー，ヴィース，シュピーリ，シールスフィールド，ナオゲオルゲ，ニーベルガル，バープ，ハラー，ハルトレーベン，ヒルティ，フリッシュリーン，ヘットナー，ホルタイ，ムシュク，ラウパハ　『世界文学大事典』(集英社)　1996年10月

17. 匿名記事

カフカ再び“有罪判決” 『日本経済新聞』 1972年7月◆画家エルンストの演劇 『日本経済新聞』 1972年9月◆一変したブレヒトのイメージ 『日本経済新聞』 1973年6月◆（「海外論調」を不定期連載） 文芸春秋社『諸君！』 1969年7月～1974年

18. その他

18.1. 文学関係

ヴォルテールとユゴー 『新潮世界文学全集 第10巻 レ・ミゼラブルⅠ（佐藤朔訳）』（新潮社）月報 1959年9月◆ケストナーの最後の沈黙 中央公論社『海』1974年10月◆ゲーテを見るゲーテ自身のまなざし 日本ディルタイ協会『ディルタイ研究』2号 1988年10月◆詩を彫った人 ―バルラハの人間像と詩との関係― レアリテの会『舟』71号 1993年4月◆小説の設計と内装―丸谷才一―「女ざかり」 三田文学会『三田文学』33号 1993年5月◆〔私の推す恋愛小説，この一冊〕 トーマス・マン「ワイマールのロッテ」 三田文学会『三田文学』53号 1998年5月◆「三田文学」新旧談義 三田文学会『三田文学』56号 1999年2月◆ゲーテの魅力を探る―ゲーテ生誕250年にちなんで― 江ノ電沿線新聞社『江ノ電沿線新聞』283号 1999年5月

18.2. 書評

ヨーロッパ近代演劇史の基点 レッシング著『ハンブルグ演劇論』（奥住綱男訳）『日本読書新聞』 1972年10月◆「To Be, Or Not To Be」（木下順二対談集 筑摩書房） 文芸春秋社『諸君！』 1972年10月◆アウトサイダーの憂鬱と絶望 ―ハインリヒ・ベル「道化師の告白」― 朝日新聞社『朝日ジャーナル』 1973年8月◆ゲーテの青春を追って―玉林氏の「若きゲーテ研究」にことよせて― 創文社『創文』 1974年11月◆道化 したたかな愚者たちの歴史的パノラマ ―ウェルズフィールド著「道化」― 『日本経済新聞』 1979年7月◆小塩節著「ライン河の文化史」『日本経済

新聞』 1982年10月◆「欧米文芸登場人物事典」 大修館書店『国語教室』 1986年10月◆1987年読書アンケート　みすず書房『みすず』 1988年１月◆上野美子著「ロビン・フッド」伝説　大修館書店『英語教育』 1989年１月◆1988年読書アンケート　みすず書房『みすず』 1989年１月◆1989年読書アンケート　みすず書房『みすず』 1990年１月◆1990年読書アンケート　みすず書房『みすず』 1991年１月◆1991年読書アンケート　みすず書房『みすず』 1992年１月◆1992年読書アンケート　みすず書房『みすず』 1993年１月◆1993年読書アンケート　みすず書房『みすず』 1994年１月◆1994年読書アンケート　みすず書房『みすず』 1995年１月◆1994年読書アンケート　みすず書房『みすず』 1996年１月◆1996年読書アンケート　みすず書房『みすず』 1997年１月◆1997年読書アンケート　（毛利三弥訳『イプセン戯曲選集　現代劇全作品』ほか） みすず書房『みすず』 1998年１月◆1998年読書アンケート　（『ブレヒト戯曲選集』ほか） みすず書房『みすず』 1999年１月◆1999年読書アンケート　みすず書房『みすず』 2000年１月◆2000年読書アンケート　（『創造の瞬間』ほか） みすず書房『みすず』 2001年１月

18.3. 読書案内

学問のすすめ（福沢諭吉）『日本文芸鑑賞事典　近代名作1017選への招待 1870～1895　1』（ぎょうせい） 1987年８月◆歴史にふれる喜び／人も本も出会いが大事 『日曜日の図書館』（増進会出版社Ｚ会ベブル選書）所収 1995年５月

18.4. チェコ・東欧関係

プラハのファウスト博士たち　―旅日誌抄―　日本ゲーテ協会『べりひて』 1967年10月◆プラハの憂鬱（付イェツディンスキー「かくてチェコスロヴァキアは捕らえられた」［英文からの翻訳］） 文芸春秋社『諸君！』 1973年６月◆国境の衝撃　文化総合出版『泉』 1983年５月◆ドレスデンでホフマンを偲ぶ　日本DDR文化協会『日本DDR文化協会報』秋季号

1986年11月◆今は昔の物語　―東欧の新局面を喜びながら思い出すことども―　郁文堂『Brunnen』321号　1990年３月

18.5. 外国についての随想

ミニ・サイズのヨーロッパ　三修社『基礎ドイツ語』 1970年10月◆日本をはなれて日本を考える　―随想的文化私観―　関東学院大学工学部教養科『科学／人間』２号　1970年12月◆東極と西極　文化総合出版『泉』1982年６月

18.6. 時事問題

闇の中の信号の美しさ　文芸春秋社『諸君！』 1976年２月◆「性」を裁く法のジレンマ　朝日新聞社『朝日ジャーナル』 1978年４月

18.7. 学習案内

ドイツ文学　旺文社『螢雪時代 臨時増刊 学部・学科案内号』 1984年４月◆ドイツ文学　旺文社『螢雪時代 臨時増刊 学部・学科案内号』 1985年４月◆ドイツ文学　旺文社『螢雪時代 臨時増刊 学部・学科案内号』1986年４月◆ドイツ文学　旺文社『螢雪時代 臨時増刊 学部・学科案内号』 1987年４月◆ドイツ文学　旺文社『螢雪時代 臨時増刊 学部・学科案内号』 1988年４月◆ドイツ文学　旺文社『螢雪時代 臨時増刊 学部・学科案内号』 1989年４月◆ドイツ文学　旺文社『螢雪時代 臨時増刊 学部・学科案内号』 1990年４月◆ドイツ文学　旺文社『螢雪時代 臨時増刊 学部・学科案内号』 1991年４月◆ドイツ文学　旺文社『螢雪時代 臨時増刊 学部・学科案内号』 1992年４月◆ドイツ文学　旺文社『螢雪時代 臨時増刊 学部・学科案内号』 1993年４月◆人間文化を多角的に学ぶ意義と喜び　慶大　増進会出版社『増進会旬報 増刊』 1994年１月◆ドイツ文学　旺文社『螢雪時代 臨時増刊 学部・学科案内号』 1994年４月

18.8.「ゲーテの詩朗読コンテスト」関係

さわやかな熱気　―ゲーテの詩・朗読コンテスト―　日本ゲーテ協会『べりひて』24号　1983年5月◆詩を語る心と聞く耳　日本ゲーテ協会『べりひて』26号　1985年5月◆ゲーテの詩を読む人々　中央公論社『中央公論』1991年11月

18.9. 小随筆

ハイクと俳句　『波』(俳句雑誌)　1982年9月◆りんごのこと　『波』(俳句雑誌)　1983年9月◆スケッチの旅　―緑の樹林―　『聖教新聞』　1990年5月◆スケッチの旅　―スイスの香具師―　『聖教新聞』　1990年5月◆肩肘張らないですむ交際と文集　慶應宮下塾(通信教育部で卒論指導する人達のグループ)『VOYAGE』創刊号　1995年8月◆人生をふりかえる年頃　慶應宮下塾(通信教育部で卒論指導する人達のグループ)『VOYAGE』2号　1996年8月◆アルプス・スケッチ行(上)　―巨大なマッターホルンを見上げる―　『聖教新聞』　1996年10月◆アルプス・スケッチ行(下)　―心なごませた青緑色の流れ―　『聖教新聞』　1996年10月◆わが絵の歴史に宿る喜びと悲哀　慶應宮下塾(通信教育部で卒論指導する人達のグループ)『VOYAGE』3号　1997年8月◆〔私を山にいざなった本〕『山を憶へば』　心のガイドブック　東の山　東京新聞社『岳人』　1998年5月◆VOYAGEという言葉について　慶應宮下塾(通信教育部で卒論指導する人達のグループ)『VOYAGE』4号　1998年8月◆草野君の詩集復活に寄せて　草野講壽『夏の日の記録　生命の賛歌』(私家版詩集,丸善出版サービスセンター制作)所収　1998年11月◆〔芸術展望〕　富士から始まる　『聖教新聞』　1999年1月◆〔芸術展望〕　悲劇と喜劇　『聖教新聞』　1999年2月◆〔芸術展望〕　人形　『聖教新聞』　1999年3月◆身売り娘を助けた人　横浜慶友会有志『ともづな』　4号　1999年4月◆〔芸術展望〕　濃密な時間　『聖教新聞』　1999年4月◆〔芸術展望〕　数の因縁『聖教新聞』　1999年5月◆〔芸術展望〕　若い人たちへ　『聖教新聞』　1999年7月◆「追悼　江藤淳」雷雨が演出した決断　三田文学会『三田文学』No.59(1999秋号)　1999年11月◆〔文化〕　シュピーリと山の娘ハイ

ジ 『聖教新聞』 2001年2月

18.10. その他

ドイツの大学めぐり3 —ゲッチンゲン大学— 大学書林『月刊ドイツ語』 1967年7月◆悩み悩ませる学生たち —西ドイツの学生運動— 三修社『基礎ドイツ語』 1969年1月◆Ho, Ho, Ho...! —荒れる大学の渦の中で— 三修社『基礎ドイツ語』 1969年10月◆学園との三年間の縁 湘南学園『学園通信』73号 1978年11月◆山と絵のある人生 慶應BRBフォーラム事務局発行『慶應BRBフォーラム』 1993年12月◆グリム童話は弱者をはげます 「たまがわ げき'96物語の魔法」上演パンフレット 1996年1月